慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	文学と歴史の対話 : 話劇『曙光』を中心として
Sub Title	A dialogue between literature and history : focusing on the stage play "Dawn"
Author	崔, 靖宜(Cui, Jingyi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2023
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.124, (2023. 6) ,p.149 (112)- 166 (95)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01240001-0149

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

文学と歴史の対話
── 話劇『曙光』を中心として

崔　靖宜

はじめに

白樺（1930-2019）、本名は陳佑華である。幼年時代、日中戦争時に父親は日本軍に生き埋めにされ、家族と逃亡生活を送った。1946年、はじめて白樺の筆名で処女作・詩「織工」を発表した。1947年に中国人民解放軍に入隊し、1952年、昆明軍区や総政治部創作室の創作員をつとめ、1956年、北京中国人民解放軍総政治部創作室の創作員になった。1955年、「胡風事件」に巻き込まれて審査され、また1957年に右派とされ、そして文化大革命（以下「文革」と表記する）開始後、七年間ほど武漢で隔離審査を受け、数奇な前半生を歩んだ。

「文革」が終わったのち、白樺は再び創作活動を開始した。その作品群の中で、文学研究者の注目を集めたのが『苦恋』（1979）である。白樺が脚本を執筆し、制作に携わった映画『苦恋』（別名『太陽和人』）では、アメリカで名声を博した画家凌晨光が中国に帰国したのち、「文革」で残酷な迫害を受け、やがて「四五運動」に参加して追われる身となり、葦の茂みに逃げ込んで原始人の如き生活を送り、ついに雪原で死を迎えた話を描く。この作品は、1981年に内部上映の段階で鄧小平の不評を買い、現在まで公開されることがなかった。『苦恋』をめぐって、1981年4月20日付の『解放軍報』は特約評論員の長文「四項基本原則不容違反 ── 評電影文学劇本『苦恋』[1]」を発表し、『苦恋』を「無政府主義、極端な個人主義、資産階級の自由化および四つの基本原則の否定」として告発した。のちに『北京日報』や『解放日報』などがこの文章を転載し、約一年間激しい批判を展開した。

白樺は作家として『苦恋』以外にも多くの作品を発表したが、文学研究におい

てそれらの作品は長らく重要視されてこなかった。本論文で取り上げる話劇『曙光』は1977年に雑誌『人民戯劇』第9期に発表され[3]、1930年代に湘鄂西ソビエト区で実際に起きた粛清事件を背景として描いた白樺の代表作の一つである。この作品は、歴史に対する白樺の姿勢を色濃く反映し、白樺文学および新時期文学を研究する上で欠かせないものだといえる。

『曙光』は1990年代から中国の一部の研究者の注目を集めたものの、政治的に敏感な問題を含んでいると認識されたため、『曙光』への考察が十分にされてきたとは言い難い。まず、『曙光』に関する論考をまとめる。黄子平は『革命・歴史・小説』（1996）の中で、『曙光』は『苦恋』よりも重要であり、1985年以降に発表された「革命歴史小説」のパラダイムを覆した一連の小説の濫觴だと評価を下した[3]。陳思和は『中国当代文学史教程』（1999）において、『曙光』は劉心武「班主任」（1977）や徐遅「哥徳巴赫猜想」（1978）とともに、新時期文学の「春を告げる三匹のツバメ」だと評価し、中国現代文学史における『曙光』の立ち位置を確立した[4]。この二つの論考は『曙光』の文学史上の価値を指摘したが、作品への詳細な分析が欠けている。また、傅謹は『曙光』は演劇界に変化をもたらしたが、芸術的な面からみると特に優れているところがないと述べ[5]、陳麗芬は『曙光』は完全に史実に従って書いた作品だと主張する[6]。後述するように、『曙光』は度重なる改変が加えられており、事実をありのままに描いた作品ではないため、陳の論述は裏付けのないものだと考えられる。

本論文は、『曙光』の再評価を目的とする。第一に、『曙光』の作品概要、脚本の創作背景、作品および上演情報、上演までの経緯などを考察する。第二に、『曙光』の脚本が改変されてきた問題について検討を加え、そこから「文革」直後の中国文芸界の一面を探り、最後に、歴史との向き合い方を検討し、『曙光』の特徴や意義を考察する。

一、話劇『曙光』について

まず、『曙光』の梗概を確認する[7]。1931年、湘鄂西ソビエト区洪湖革命根拠地は中央から派遣された政治委員林寒を代表とする幹部たちを迎える。洪湖の事情を顧みず、「王明路線」を推し進める林寒は、有能な地方幹部馮大堅を「国民党改組派」の名分で処刑し、党内粛清運動をはじめる。その結果、洪湖根拠地は大

きな損害を受け、紅軍師長岳明華まで犠牲者になるところだったが、危機一髪、軍長賀竜は岳明華を救い、紅軍を導いた。遵義会議後、毛沢東の党内最高指導権が確立され、共産党は「毛沢東路線」に転換する。そこで、林寒の秘書蘭剣は国民党密偵であることが発覚し、処刑され、また「毛沢東路線」と対立する「王明路線」を擁護した林寒は処罰を受けることになる。『曙光』は架空の物語であるが、1930年代前半に湘鄂西ソビエト区で起きた共産党内部の粛清事件を元にして作られた作品であり[8]、実在の人物をモデルとするキャラクターも登場した。例えば、物語の中に登場した紅三軍軍長、紅二軍団団長、紅二、六軍団総指揮賀竜は、新中国建国に功労を残した賀竜元帥をモデルとするキャラクターであり、紅軍独立団団長、師長岳明華は、段徳昌[9]をモデルとするキャラクターである。また、粛清事件の責任者である夏曦をモデルとする中共中央湘鄂西分局書記林寒や、国民党密偵姜琦をモデルとするキャラクター蘭剣も登場し、悪役を演じた。

なぜ白樺はこの半ば歴史の闇に葬られた事件を「文革」の終わった直後に話劇の形で世に出したのだろうか。『曙光』の創作背景について、彼はのちに「賀竜的百年征途[10]」で以下のように述懐した。1952年、当時二十二歳の白樺は重慶西南軍区に赴き、賀竜の口述を聞き、その建国前の戦闘経験などを記録する仕事を任された。偶然、白樺は段徳昌の未亡人劉淑雲からはじめて段徳昌の死因や1930年代の党内闘争の話を聞いた。しかし、彼が賀竜に事件の経緯を聞いたところ、賀竜は「言い淀んでしまい、何度も心が痛み、長い時間話を中断した[11]」。そしてなぜこのような事件が起きたかという白樺の疑問に対し、正面からの答えを避け、単に「あの時期、われわれはとても困難であり、世間の状況に疎くなっており、とても幼稚だった。党も未熟な時期にあった[12]」と言い、湘鄂西ソビエト区の粛清事件については詳しく語らなかった。

1975 年初冬、白樺は中国歴史博物館の調査班に随行してはじめて洪湖を訪問した。「文革」初期に断罪された賀竜にまつわる問題は洪湖の多くの人を巻き込んだので、一刻も早く賀竜の第一段階の名誉回復の知らせを洪湖に伝えたいという思いのもと、賀竜の長女賀捷生は調査班の一員として同行した[13]。はじめて洪湖を訪れ、地元の民衆から昔話を聞いた白樺は、粛清事件への認識を深め、さらに段徳昌の遺言を知って心を揺さぶられ、人前で慟哭したという[14]。この洪湖への訪問は白樺に衝撃を与えた。1976年10月、彼は「四人組」が逮捕されたニュースを聞いてすぐに脚本『曙光』の執筆に着手し、一週間で初稿を仕上げた[15]。

1976年11月5日、白樺は武漢で脚本初稿の執筆を終えた。しかし、『曙光』を舞台で演じる許可は容易に得られるものではなかった。初稿の執筆完了後、白樺は武漢軍区の指導者らに脚本を朗読し、その結果、「多くの人が受け入れられず、恐れおののいた。でも、真実の魅力は彼らを震撼させた[16]」。武漢軍区司令員楊徳志や政治委員王平は『曙光』の話に惹かれ、白樺に親書の紹介状を渡し、賀竜元帥の元部下の将軍たちの意見を聞くことを勧めた。その後、白樺は北京や南京に赴き、二十人以上の軍の幹部や文芸家に一対一で脚本を朗読して聞かせた。白樺の朗読を聞いた幹部たちは感動し、たとえば南京軍区政治委員廖漢生は最初のうち心ならずも聞いていたが、第二幕から涙がとまらず、最後まで泣いていたという。このように、白樺の努力が報われ、『曙光』は武漢でリハーサルの機会を得ることになった。

1977年7月、中国話劇団と中国人民解放軍武漢部隊政治部話劇団によって『曙光』は武漢で二回リハーサルをした。幹部たちの指摘のもと、白樺は『曙光』の初稿を改変し、北京で再びリハーサルをした後、一ヶ月ほど内部上演をした。その際、『曙光』の公開上演に猛反対し、共産主義運動に対して悪辣に攻撃する作品として強く批判する人がいたため、中央宣伝部、文化部は『曙光』の公開上演の許可をためらったが、最後はようやく軍の幹部から許可を得て公開上演が可能になった。同年9月、改変された脚本が雑誌『人民戯劇』第9期に掲載され（以下、「雑誌版」と略する）、のちに北京で一般大衆に向けて正式に上演した。全六幕であり、監督は鄧止怡、王殿璽である。1978年8月、『曙光』の「雑誌版」は単行本として人民文学出版社によって刊行された。

1978年秋冬頃、白樺は二回目となる脚本の改変をした。この改変された脚本にもとづき、『曙光』は中国青年芸術劇院によって北京で公開上演された。監督は鄧止怡、王倍、郭平である。1979年1月、『曙光』は「慶祝中華人民共和国建国三十周年献礼演出[17]」に参加して一巡目に上演され、1980年4月、「献礼演出」一等賞を受賞した。1980年9月、二回目に改変された版本が『慶祝中華人民共和国建国三十周年献礼演出 獲創作一等奨 劇本選集（上）[18]』に収録された（以下、「献礼版」と略する）。

上述したように、1977年から1979年までの間、脚本『曙光』は二回も改変を余儀なくされた。次の節では、この改変問題をめぐって、テキストの変化を検討しながら、改変理由を考察していく。

二、話劇『曙光』の改変問題をめぐって

1. 初稿から「雑誌版」への改変

1977年、『曙光』は雑誌『人民戯劇』第9期に掲載され、初稿が完成されて約10ヶ月後に発表された。この脚本において、初稿の中で物議を醸した英雄人物岳明華の結末が一転する。この他にも、上演を実現させるためにおこなった「心を偽った改変[19]」があるという。初稿が未発表であるため、初稿のテキストを確かめることはできないが、白樺の講演などの資料をもちいて考察していく。

まず、段徳昌をモデルとする主要キャラクター岳明華の結末の改変問題をみていこう。歴史の中で、実在の段徳昌は洪湖根拠地の創始者の一人であり、紅軍を率いて国民党との戦闘を数多く経験した地方の高級幹部である。1933年、彼は第三回粛清事件の際に中央幹部夏曦の手によって命を落とした。妻の劉淑雲は精神的に苦しめられ、流産した。『曙光』の初稿では、段徳昌をモデルとする岳明華の死が描かれていたが、武漢でのリハーサルのときに、幹部たちに受け入れられなかった。この件について、白樺は以下のように述べている。

> 閉幕した瞬間、一人の元洪湖紅軍の将軍が顔を覆って劇場から逃げ出し、劇場の外で激しく泣き始めた。誰もがこれが本当の成功だと認めたはずだった。私が望んでいた効果はまさにこれだ。拍手がなく、涕泣と思索だけがあるのだ。しかし、当時の軍の幹部たちは、大団円的なハッピーエンドがなかったので、このような結末は公演できないものだと思っていた[20]。

白樺は妥協せずに自分の意志を堅持したが、作家馮牧が白樺に「ステージで主人公を犠牲にすれば、劇全体も犠牲になる。主人公を犠牲にしなければ、劇全体が救われるようになる[21]」と忠告した。主要キャラクターを犠牲にするか、それともこの話劇を台無しにするか、白樺は葛藤に苛まれていたと想像される。最終的に、白樺が馮牧の忠告を受け、岳明華の死を描くことを断念したのは、『曙光』の上演をあきらめたくなく、人々に歴史の教訓を銘記させたいという願いがあったからであろう。こうして、脚本の結末は大団円に改変され、「雑誌版」の第五幕では、岳明華が殺害される寸前に、賀竜が現れて岳明華を救い出す命令を下し、岳明華が救われたことになるのである。

初稿に対するもう一つの改変は、毛沢東思想を賛美するセリフの書き加えである。無事に公演できるように、やむを得ず何度も登場人物のセリフに毛沢東思想を称える言葉を入れたと、白樺は振り返った。なぜなら、「このように書かなければ上演できない。当時の観衆にも受け入れられない[22]」からである。例をあげると、段徳昌の遺言の「紅軍を洪湖の人民から離してはいけない」という一節が、段徳昌をモデルとする岳明華の遺言では、「共産党しか中国を救うことはできない。毛主席しか党を救うことはできない[23]」という毛沢東賛美の一節に変えられている。1930年代前半、各ソビエト区は独自に革命を起こし、しばしば通信が途絶えている状態にあった。毛沢東は中央ソビエト区の幹部であり、紅一方面軍を率いて多大な功績を残したが、当時の混沌とした時代において湘鄂西ソビエト区に及ぼす影響はきわめて小さいといえよう。こういった改変は、歴史的事実に背いているものである。

『曙光』の初稿が完成した時期は、華国鋒を中心とする中共中央政治局が「四人組」を逮捕した直後である。しかしながら、「文革」が終わり、文芸界にやっと春が訪れたと思われたこの時期には、中国現代文学史上における二つの重要文献、すなわち「在延安文芸座談会上的講話」や「林彪同志委託江青召開的部隊文芸工作座談会紀要」は中共に否定されていなかったのである。毛沢東の「文芸講話」は1942年に発表されて以来、中国文芸の第一綱領として文芸路線の方向を示した。また「紀要」は1966年2月に開催された部隊文芸工作座談会で提起され、のちに毛沢東自身が三回にわたって加筆した文書であり、1979年5月に中共が「紀要」を撤廃するまで、十年以上中国文芸の桎梏として文芸界に君臨して統治していた[24]。

この状況で、1977年以降、「四人組」への批判をテーマとする作品が世に出るようになったが、依然として「高大全」「三突出」を代表とする「文革」時期の文芸理論の痕跡は残っており、作品構成、人物像やプロット設定は「文革」時期に形成された芸術的風格の延長線上にあった。『曙光』の初稿の結末が悲劇的色彩を一掃し、主要な英雄人物が数々の困難を乗り越え、誤った路線を克服して階級の敵に打ち勝った物語に改変されたことも、「文革」時期の創作方法の束縛から逃れられなかった結果だと考えられる。

また、1977年2月7日に『人民日報』『解放日報』などが「学好文件抓住綱」という文章を発表し、華国鋒政権が「両個凡是（すべての毛主席の決定は断固守ら

ねばならず、すべての毛主席の指示には忠実に従わなければならない)」の観点を提唱した。「四人組」が打倒されたにもかかわらず、毛沢東思想の絶対的権威は安易に揺るがないものであったと解釈できよう。それゆえ、毛沢東賛美のセリフを『曙光』に書き加える必要性が生じてしまい、初稿の改変を経て「雑誌版」の内容にいたったと推測される。

2.「雑誌版」から「献礼版」への改変

本節では、「雑誌版」と二回目となる改変をされた「献礼版」とを比較する。まず、注目すべき点は、賀竜の物語における役割の改変である。

「雑誌版」の中で、賀竜は岳明華を救う場面で活躍するが、あくまで共産党の「正しい路線」の代弁者をつとめる人物である。彼は中心人物ではないので、出番が少なく、第一幕と第二幕では、姿を現していない。「雑誌版」を脚本とする話劇『曙光』に対し、肯定的評価が多数を占めているが[25]、賀竜は「正しい路線」の代表とはいえ、衝突の中に身を置いていなかったという指摘もみられる[26]。それと比べ、「献礼版」において、賀竜は第一幕から登場し、セリフが多く加えられ、その果たした役割が強調された。とりわけ、賀竜は、「雑誌版」では正面から林寒とぶつかっていないが、「献礼版」では林寒の描いた戦闘配置図に異議を唱え、林寒と対立する兆しを見せた。

さらに、「雑誌版」の賀竜の人物像が平板的であるのに対し、「献礼版」ではその人物像が魅力的で立体感がある。たとえば、「雑誌版」第一幕に登場していない賀竜は、「献礼版」の第一幕において、虚構のキャラクター岳菱姑（赤衛隊長、紅軍独立団団長、岳明華の妹）と馮大堅（省ソビエト政府保衛局長）に冗談を言い、恋心を打ち明けていない二人を仲良くさせようとした。高級幹部であるにもかかわらず、部下の気持ちに寄り添い、よく洒落を飛ばす賀竜像を鮮明に浮かび上がらせたのである。

次に、他の登場人物の役割の改変に注目する。一点目は、男女の愛情要素が加えられたことである。岳菱姑と馮大堅は、「雑誌版」では単なる同志であるが、「献礼版」では相思相愛の仲に改変された。そして二点目は、悪役の悪行を強調する場面が増やされたことである。「献礼版」では、国民党密偵・蘭剣の罪深さが一層印象付けられ、国民党と共産党の衝突がより激しく描かれるようになった。ここで、「雑誌版」と「献礼版」の第六幕における物語の最高潮のシーンを

引用して比較する（下線は筆者による）。

「雑誌版」	「献礼版」
戦士甲　総司令官に報告！国民党の犬、スパイ蘭剣が逃走しましたが、すでに捕らえました！ 賀　竜　（ポケットからパイプを取り出し、火をつけ、長々と一口吸った）連れてこい！ 戦士甲　はい！ 〔戦士甲は下がり、その後すぐに戦士乙が私服に着替えた蘭剣を護送して上がる。賀竜はそばにいる戦士の手元から銃剣が取り付けられたライフルを持ってくる。蘭剣は怖がってたじろぐ。岳老根は賀竜に近づいて手を伸ばし、賀竜はライフルを岳老根に渡す。金莓英は歩いてきてライフルを掴み、岳老根はライフルを金莓英に渡すしかない。金莓英が銃を持ちあげようとすると、小高は行進の歩調で金莓英の目の前にきて挙手の礼をする。金莓英は小高に銃を渡し、小高は銃を取り、手慣れた調子でガラッと撃鉄を引いて弾帯から一列の弾丸を取り出し、銃の中に強く押し込み、憤怒に燃えた目で蘭剣を見つめる。そして銃を突き上げて蘭剣を狙い、蘭剣はよろめいて後方に下がる。「バババ」と三発連続で発射する。群衆は奮い立っている[27]。	岳菱姑　（被り笠を脱ぐ）あの時、あなたたちが去った後、私は被り笠に大堅さんが敵から持ち帰った資料が隠されたのを発見した。すごく焦ったのよ！でも渡す方法がなかった。（懐からその資料を取り出す） 岳明華　（びっくりして）これは中央分局の決議だ…… 岳菱姑　（資料の裏面を指す）裏面を見て。 岳明華　（読み上げる）「受け取りましたら、暗号でお知らせします」。これは蘭剣の筆跡だ。やっぱり敵に情報を送ったのはあいつだ！ 岳菱姑　（憤って）蘭剣！ 〔…〕 戦士甲　総司令官に報告！国民党の犬、スパイ蘭剣が逃走しましたが、すでに捕らえました！ 賀　竜　（ポケットからパイプを取り出し、火をつけ、長々と一口吸った）連れてこい！ 戦士甲　はい！ 〔戦士甲は下がり、その後すぐに戦士乙が私服に着替えた蘭剣を護送して上がる。 〔賀竜は喜子の手元からライフルを持ってくる。岳老根は賀竜に手を伸ばし、賀竜は岳老根にライフルを渡す。また菱姑は岳老根に手を伸ばし、岳老根はライフルを娘に渡す。菱姑は銃を取り、落ち着いて撃鉄を引く。大堅の仇を打つために、彼女は憎しみの弾丸を撃つ。その後さらに二発を撃ち、蘭剣は射殺され、群衆は奮い立っている[28]。

「雑誌版」では、第六幕のクライマックスにおいて、蘭剣が国民党密偵であることが「戦士甲」のセリフからわかるようになった。そしてこれ以上の詳しい説明がないまま、小高に処刑される。物語における蘭剣の存在感は薄く、彼が共産党内部に潜入できたのは、林寒の「左」傾路線の誤りによるものであり、その隙を突かれたことが原因である。つまるところ、物語の中心は共産党内部の闘争にある。

しかし、「献礼版」では、物語のはじめに岳菱姑が馮大堅に渡した被り笠が全体のストーリーの中で重要な「伏線」となり、この「伏線」は第六幕で回収され、蘭剣の罪が暴露される展開となった。その上、小高が蘭剣に止めを刺した場面も岳菱姑に処刑されるように改変された。小高の代わりに、馮大堅を愛する岳菱姑が蘭剣を殺し、馮大堅の仇を撃つことによって国民党と共産党の衝突がより激しいものに描かれている。こうして、物語における蘭剣の存在感が濃く描き出されており、蘭剣を描く場面が増やされ、キャラクターとしての重要性が増した。読者（観衆）の怒りの矛先は蘭剣の方により強く向けられ、本来であれば批判されるべき林寒の過ちは弱めて描かれている。結果的に、党内闘争の色は褪せていき、物語の焦点は国民党と共産党の間の敵対へと変化したのである。

なぜ「雑誌版」からさらなる大きな改変をしたのかについて、白樺がその事情を説明する資料は残されていないが、改めて1978年における中国文芸および政治動向をみると、改変のゆえんを窺い知ることができる。1978年2月26日、華国鋒は第五期全国人民代表大会第一次会議で報告をし、「文革」後の文芸路線について指示を下した。「文芸戦線の目下の重要任務は、党の文芸政策の調整に関する毛主席の指示を誠実に実行し、文芸工作を整頓し、『四人組』の破壊によって引き起こされたさまざまな文芸作品の不足状況を迅速に変え、文芸プログラムを増やし、文化生活を豊かにすること[29]」と述べられた。華国鋒は、現代革命を題材とし、特に社会主義時期の三大革命運動を反映する題材を推奨し、その上、毛沢東文芸路線である「両結合」(革命的リアリズムと革命的ロマンチシズムの結合)の創作方法を提唱した。また、「われわれの文芸従事者は雄大な志を抱くべきであり、毛主席、周総理、朱委員長や他の前世代のプロレタリア革命家の輝かしい功績を反映し、われわれの党の導きのもとでの人民革命闘争の戦闘経験を反映する優れた作品を創造するよう努力しなければならない[30]」と具体的な方針を

定め、前世代の高級幹部を賛美する作品の創作を促進した。

それに対し、文芸界は速やかに反応し、中央の指示に服従して、座談会や討論会などを開催した。1978年5月18日～31日、全国戯劇創作座談会が開催され、文化部部長黄鎮、副部長周巍峙、賀敬之、林黙涵、そして劇作家や文芸評論家周揚、夏衍、曹禺などが参加し、舞台で前世代の革命家を形象することが「当然の責務で光栄なる歴史的任務[31]」との意見を表明した。また、同年10月6日から約一ヶ月間、文化部芸術局、文学芸術研究院、中国戯劇協会によって主催された「戯曲、歌劇現代題材作品討論会」が北京で開催され、19の脚本をめぐって議論を展開して修正をおこない、作品を通していかにして前世代の革命家を形象するのかなどの課題について互いに交流した[32]。

同時に、1978～1979年の間には共産党高級幹部の功績を称える話劇が著しく増えていき、国が直面する危機に対して勇敢に立ち向かう高級幹部たちの姿を称賛する作品が多く作られた。たとえば、『西安事変』（1978）は、中国の未来を憂い、国民党と和解して抗日統一戦線の構築に尽力する周恩来像を描き、『丹心譜』（1978）、『報童』（1978）、『涙血桜花』（1979）、『滚滚的黄河』（1979）は老若男女を問わず、中国人民に優しく接する周恩来像を描いた。また、『東進！東進！』(1978)、『陳毅出山』(1979）は日中戦争時期の陳毅を主人公にした話劇である。こうした背景の下で、文芸路線の趨向に従い、『曙光』は共産党の内部闘争に光を当てて過去を反省する作品から、高級幹部賀竜を褒め称える作品へと改変されたと考えられるのである。

三、『曙光』の意義――歴史との会話

1932年から1934年夏まで、湘鄂西ソビエト区では夏曦主導の粛清運動が四回も起きた。第一回粛清運動は1932年5月にはじまり、同年11月～12月に第二回粛清運動、1933年2月～4月に第三回粛清運動、1933年6月～1934年夏に第四回粛清運動が発生した。本節では湘鄂西ソビエト区の粛清運動に関する言説についての考察に加えて、話劇『曙光』の特徴や意義を論じたい。

まず、1961～1962年の賀竜の発言より整理した回想録「回憶紅二方面軍」をみていこう。この文章は1981年に雑誌『近代史研究』に発表され、湘鄂西の粛清運動の真相を赤裸々に暴き出した。賀竜は粛清運動の残酷さを回顧し、「洪湖

の県と区の幹部たちは『粛反』で皆殺しされた。紅三軍のある連隊では、あわせて十数人以上の連長が殺された。夏曦は洪湖で数ヶ月も殺し続けて、この『粛反』だけで一万人あまりも殺した[33]」と述べ、第一回粛清運動時の死者は一万人以上だと振り返った。そして、「現在生きている女の同志たちについては、あの時、男を先に始末してから女を殺したが、途中で敵がきたので、女の同志たちを殺すのに間に合わず生き残ることとなった。洪湖が失敗して夏曦と紅三軍が大洪山で会合し、そこで軍がグルグルとまわっていた時に、夏曦はいつもどおりに昼間に人を捕まえて夜間に殺していた。人を捕まえ、殺したことを示す証拠はなく、皆名指しで自供させたものだった[34]」と細部にわたって夏曦の罪深さを明らかにした。さらに、段徳昌の死についても触れて、「麻水についたら、段徳昌と宋盤銘は手紙で洪湖に帰ることを勧めてきた。夏曦は段徳昌が九師を連れて逃げようとすると言った。あの時、九師は沙道溝にいて、僕は彼が逃げるはずがなく、逃げるのであれば手紙を出すわけがないと言った。でも、結局彼を鄔陽関から呼び出してきて、夏曦は段徳昌が『紅軍を分裂させるもの』なので、『厳しく鉄槌を下さねばならない』と言った。その日に批判をして、その次の日に金果坪で彼を殺害した[35]」と述べた。また、この粛清運動は、「夏曦だけが責任を負うべきでなく、関向応にも責任がある[36]」と言った。賀竜の回想録は、湘鄂西の粛清運動の当事者の発言が公開された最初の文献である。その後、1985～1990年代前半、粛清運動の当事者の証言が次々と発表されたのである。

続いて中共正史の言説の変化する過程をみていく。1945年4月、中共第六期中央委員会第七回全会で「関於若干歴史問題的決議」が採択された。この文書は中共創立以来から遵義会議までの間のさまざまな歴史問題について結論を下し、それまでの中共の歴史を総括したきわめて重要な歴史文献である。しかし、「歴史決議」には湘鄂西ソビエト区の粛清運動に関する記載などがなく、この歴史事実が忌避されていた。1951年、中共最初の公認党史と呼ばれた『中国共産党的三十年』が毛沢東の意向を受け、胡喬木の署名で公表された。建国後の初の本格的党史とはいえ、1930年代の粛清運動には触れておらず、その大惨事が中共正史から抹消された状態が続いていた。「文革」終了後、1981年に中共第十一期第六回全会において鄧小平政権によって「関於建国以来党的若干歴史問題的決議」が承認された。「第二の歴史決議」だといわれる本決議は、中国社会主義初期段階の成果を評価するとともに、「毛沢東個人」、「毛沢東思想」、「文革」をそれぞれ

部分否定、全面擁護、全面否定という形で提示したものであるが、依然として1930年代の出来事には言及しなかった。

1991年、中共創立七十周年に際して、中央の要請を受け、中共正史の代表の一つと認識された『中国共産党的七十年』が胡繩や胡喬木らの党史研究者によって編纂された。管見のかぎり、この正史において、今まで伏せられていた1930年代の粛清運動に関する歴史事実がはじめて公認されたようである。本書は以下のように指摘した。

> 湘鄂西の紅二軍団（賀竜が総指揮、周逸群、鄧中夏が歴代の政治委員をつとめる）は、1930年冬から、反「包囲討伐」作戦で数々の戦果を挙げていた。洪湖地区の紅軍は、湖水網の有利な地形を利用してゲリラ戦を繰り広げ、敵に大きなダメージを与えた。しかし、四中全会以降に中共湘鄂西中央分局書記兼紅三軍（紅二軍団は1931年3月に紅軍第三軍に改編された）政治委員に任じられた夏曦は、同じく「左」傾冒険主義と宗派主義の方針を実行し、粛清闘争の中で段徳昌をはじめとする多くの優秀な将校を誤って殺害した。作戦において、当初は敵を軽視してむやみに進軍し、その後消極的な防御に転じ、部隊に多大な犠牲者を出し、湘鄂西から撤退せざるをえなくなった（夏曦はのちに行軍中に死亡した）[37]。

この記述は第三章「掀起土地革命的風暴」の第四節「九一八事変後国内政治局勢的変動和党内『左』傾錯誤的厳重危害」に書かれており、わずか一段落で湘鄂西の粛清運動の歴史をまとめた。粛清運動の時期、原因、死亡者数など詳しい記載はなく、夏曦の責任を一方的に強調した。それ以降の中共正史、例をあげれば、2002年に出版された『中国共産党歴史 第一巻（1921-1949）』や2016年に出版された『中国共産党的九十年』などにも類似した記載がみられ、粛清運動の原因を単なる夏曦の「左」の過ちとして括り、賀竜の回想録「回憶紅二方面軍」の内容と対照をなしたのである。

こうして、1981年、賀竜の回想録が発表され、1985年以降、湘鄂西ソビエト区の歴史に関する本が多く出版され、1990年代以降に湘鄂西の粛清運動が中共正史に記載されるようになったことがわかる。しかし、白樺は「文革」が終わった直後、つまり湘鄂西の惨劇がまだ世に知られていない時に、話劇『曙光』の創

作に着手し、誰よりも早く湘鄂西の粛清運動の問題を取り上げた。「雑誌版」発表後、白樺はエッセイの中でも1930年代の粛清事件の実態と残虐性について言及をおこなった[38]。この点は大いに評価に値するといえよう。また、『曙光』の結末が大団円に改変され、岳明華（段徳昌）が死ぬ場面の改変が余儀なくされるが、「雑誌版」では虚構の人物馮大堅が林寒の命令によって殺害される。馮大堅の死について、白樺は「歴史的信憑性と歴史的典型性を備えており、彼の死は脚本における主旨を明らかにする役割を果たしている[39]」と主張した。この重要人物の死は粛清運動の暗黒面を暴露し、読者や観衆が思考を巡らせることに有効だと考えられる。

おわりに

1975年の洪湖への訪問を通して、中華ソビエト政権時期の残酷な歴史事件のありさまを知った白樺は、終止符を打たれたばかりの「文革」から一種のデジャビュを感じたのであろう。歴史の中に埋もれた段徳昌の影は、共産党幹部らだけでなく、幾度も政治運動に巻き込まれ、政治運動の被害者でもあった白樺自身をも彷彿とさせる。『曙光』が誕生したのは、白樺自身を含め、政治運動によって凄まじい苦難を強いられた人々のためだったと考えられる。

脚本『曙光』は二回も改変を加えられた。『曙光』の初稿が「雑誌版」に改変された理由は、中共が「在延安文芸座談会上的講話」や「林彪同志委託江青召開的部隊文芸工作座談会紀要」を否定せず、その上、「両個凡是」の観点を唱えたためである。さらに「献礼版」に改変された理由は、華国鋒が「1978年国務院政府工作報告」の中で文芸路線へ指示を出し、高級幹部の偉業を礼賛する作品の創作を促したためである。そして改変された『曙光』には政治的に敏感な内容が少なからず残っているにもかかわらず、上演にこぎつけられたのは、新中国成立以来、文芸の自由が奪われつつあった文芸工作者の憤懣を晴らし、「文革」でつらい思いをした彼らへの慰撫の意味もある懐柔策によるものであろう。

これらのことから、「文革」直後、文芸が政治の力に圧倒的に凌駕され、その支配から脱却するのが難しい状況であったことがわかる。すなわち、『曙光』のような歴史の暗部を描く作品に対しても「開放」の姿勢が示され、文芸の自由がある程度容認されたが、文芸に科せられた枷は打ち砕かれず、作家たちはわずか

な創作自由を獲得したものの、敏感な題材を扱うには、依然として定められたルールを慎重に守らなければならなかったのである。しかしながら、改変された部分を除き、『曙光』は概ね歴史的事実を忠実に反映し、賀竜の回想録や中共正史などの文献よりも先に早期共産党政権の「左」傾路線の悲劇を世に語り伝えた。さらに、1930年代の粛清事件のベールをはがし、登場人物の死を描くことを通して、共産党史の根底にある「左」傾路線によって「文革」の苦汁を飲まされてばかりの読者や観衆に同じ過ちを繰り返させないように内省を促したところは評価に値する。

1979年10月30日から11月15日にかけて、十九年ぶりに「文学芸術工作者代表大会」（文代会）が開かれた。この第四回「文代会」の席上で、白樺は一万字に上る「没有突破就没有文学」という勇気ある発言をし、リアリズムの伝統の回復を懸命に呼びかけ、「百花斉放・百家争鳴」方針の貫徹や文芸独裁主義の危害を強く主張した。ところが、第四回「文代会」は文芸政策の分水嶺であり、1980年に入ると、「四人組」が失脚してから採用してきたやや「開放」的な文芸姿勢が次第に「引き締め」へと転換し、そしてついに1981年に正式な『苦恋』の名指し批判を以って「引き締め」が一層加速し、白樺が渇望する文芸の自由や民主への扉が再び閉ざされた。

白樺は多作の作家である。「文革」によって十年ほど中断した文学活動を再開し、『曙光』を創作してから『苦恋』事件が起きるまでの五年間には、作中人物の悲惨な経験を描き、影に隠された中共の歴史の暗部を暴くような特色のある作品を多く創作した。一方、「我歌唱如期帰来的秋天」（1978）、「陽光、誰也不能壟断」（1978）、「春潮在望」（1979）、「情思」（1979）など、毛沢東に対して尊敬の念を抱き、中国の未来を展望してその成長を期待する政治抒情詩も大量に書いていた。それらの詩は、白樺の心の底から湧き上がった感情の表れである。すなわち、この時期に白樺は中共批判をおこないつつ、毛沢東への尊敬の念と中共の将来への期待を保持し続け、自己矛盾を抱えながら執筆活動をおこなっていた。しかし、『苦恋』事件は白樺の創作活動にとって一つの大きな転換点となる。それ以降、白樺は中国国内では政治と一線を画して雲南省の辺境伝奇物語の創作に重きを置くようになり、ここに心境の変化が窺える。『曙光』および『苦恋』は、「文革」直後に文芸組織の再建のために、中共が一時的に「開放」路線をとることによって生み出された奇形的な産物といえよう。

『曙光』と同時期の作品をみると、劉心武「班主任」（1977）や盧新華「傷痕」（1978）など、「文革」がもたらした悲劇と当事者の心の傷あとを描く「傷痕文学」が往々にして新時期文学研究の対象として注目されてきた（『苦恋』も「傷痕文学」の一つとして研究者の注目を集めた）。その点で、「文革」よりも三十年以上前に発生し、共産党早期政権の埋もれた粛清の歴史に真正面から向き合い、中共党史の根底に存在する問題をあらわに表現した話劇『曙光』は、白樺文学だけではなく、現代文学史においてもきわめて異色な作品である。この作品は「共産党が共産党を殺す芝居」として強い批判を受け、白樺自身まで「第二のフルシチョフ」と言われ、批判されたが[40]、改変という妥協案によって、元「右派分子」のレッテルが貼られた作家と中央政権の間の絶妙な均衡を保ち、折よく「開放」の時期に発表・上演された。『曙光』は新時期文学研究に新たな示唆を与える可能性があり、現代文学史に名を残すべき作品だと考えられる。

現在、『曙光』はごく一部の研究者に注目されているものの、十分な議論がされてきたとは言い難く、さらなる研究が必要となる。本論文は、『曙光』の重要性を提起し、白樺研究や新時期文学研究に新しい視点を提供するものである。1979年、映画『曙光』が上海電影製片廠によって制作され、上映された。今後は映画版も検証対象に含めて『曙光』の論証を深めたい。

註

1　特約評論員「四項基本原則不容違反 —— 評電影文学劇本『苦恋』」『解放軍報』、1981年4月20日。

2　白樺「曙光」『人民戯劇』1977年第9期、27–65頁。

3　黄子平『革命・歴史・小説』牛津大学出版社、1996年、30頁。

4　陳思和『中国当代文学史教程』復旦大学出版社、1999年、189頁。

5　傅謹『20世記中国戯劇史』中国社会科学出版社、2017年、381-382頁。

6　陳麗芬「新時期以来歴史劇観念的解放」博士学位論文、南京大学、2011年。

7　『曙光』の初稿は未発表であるため、あらすじは雑誌『人民戯劇』の掲載作品を対象とする。

8　湘鄂西ソビエト区に起きた粛清事件の詳細に関しては、中国大陸や台湾、それに日本で発表された以下の文献を参照した。賀竜「回憶紅二方面軍」『近代史研究』1981年第1期、1-38頁。楊秀山『鮮血殷紅』北京出版社、1986年。中共監利県委党

史資料征編委員会辦公室主編『湘鄂西風暴 —— 監利革命歴史回憶』長江文芸出版社、1986年。賀彪『湘鄂西紅軍闘争史略』華夏出版社、1988年。張建徳「略述湘鄂西蘇区反“改組派”的闘争」『中共党史研究』1992年第3期、23-31頁。陳耀煌「中央湘鄂西蘇区的発展及其内部整粛（1927-1933）」『国史館学術集刊』2008年第15期、35-76頁。福本勝清『中国革命への挽歌』亜紀書房、1992年。小林一美『中共革命根拠地ドキュメント：1930年代、コミンテルン、毛沢東、赤色テロリズム、党内大粛清』御茶の水書房、2013年。

9 段徳昌（1904-1933）、湖南省南県生まれ。1925年、中国共産党に入党し、1926年、国民革命軍第八軍第一師政治部に入り、北伐戦争に参加した。大革命失敗後、故郷の鄂西に戻って革命を続けた。1930年から、中国工農紅軍第六軍副軍長兼第一縦隊司令員、軍政治委員、軍長、湘鄂西ソビエト聯県政府赤色警衛隊総隊長をつとめ、湘鄂西ソビエト区の創立や防衛に携わった。1931年4月以降、紅三軍第九師師長となり、同年11月、中華ソビエト共和国中央執行委員に選ばれた。1933年5月1日、粛清事件の中、湖北省巴東金果坪で殺害された（中国中央党史人物研究会編『中央党史人物伝 第22巻』、中国人民大学出版社、2017年、187-222頁）。

10 白樺「賀竜的百年征途」『百年一瞬』湖北人民出版社、2000年、36-70頁。

11 同注10、61頁。本論文で引用する和訳はすべて筆者の拙訳である。

12 同注10、62頁。

13 「文革」中、1969年6月9日、賀竜は迫害されて亡くなった。1974年9月、毛沢東の指示で中共中央が「関於為賀竜同志恢復名誉的通知」を発表し、賀竜の第一段階の名誉回復をした。1982年10月、中共中央が再び「関於為賀竜同志徹底平反的決定」を出し、賀竜は正式に名誉回復された。薛慶超、張勤民「賀竜元帥的蒙冤与平反」『党史博覧』1996年第5期、10–15頁。

14 段徳昌の遺言は「三つの不要」であり、一つ目は「党籍を剝奪してはいけない」、二つ目は「紅軍を洪湖の人民から離してはいけない」、三つ目は「銃弾で自分を殺してはいけない。敵を打つためにその銃弾を使おう」といわれている。

15 白樺「文学的河流 —— 2006年5月7日在曼谷『世界日報』“文芸雅聚”的演講」『白樺文集（巻三）』上海文芸出版社、2010年、667頁。

16 白樺「中国当代文学的失落与復帰 —— 一九八七年十一月二十六日在香港中文大学中文系演講稿」『白樺流血的心』明報出版社、1989年、132頁。

17 「慶祝中華人民共和国建国三十周年献礼演出」は中央文化部によって主催され、1979年1月から10月まで北京で開催された。

18 文化部献礼演出辦公室編『慶祝中華人民共和国建国三十周年献礼演出 獲創作一等奨 劇本選集（上）』四川人民出版社、1980年。

19 同注16、135頁。

20 同注16、133頁。

21 白樺「懐念馮牧 —— 2005年9月5日在昆明紀念馮牧逝世十周年的講話」『白樺文集

（巻三）』上海文芸出版社、2010年、700頁。

22 同注16、133頁。

23 同注2、59頁。

24 玄黙「鄧小平・胡耀邦新体制下における文芸政策」『中国現代文学 ── 台湾からみる中国大陸の文学現象』（小山三郎・許菁娟編著、晃洋書房、2010年、155-177頁）を参照した。

25 当時の評論「光彩照人 ── 試談話劇『曙光』賀竜形象的塑造」（張国軍『安徽師範大学学報』1977年第6期、46-48頁）、「重大的題材 光輝的形象 ── 評話劇『曙光』」（伍遠『光明日報』1977年11月29日、第2版）、「一個写路線闘争的好戯」（陶漢章『人民戯劇』1977年第10期、73-74頁）、「革命闘争的真実反映」（崇竜『人民戯劇』1978年第9期、54-57頁）を参照した。

26 「戯劇創作反映両条路線闘争的探討 ── 対話劇『曙光』的不同意見」『人民戯劇』1978年第1期、33-36頁。

27 同注2、64頁。

28 同注18、267-272頁。

29 『政府工作報告彙編（1954–2017）上巻』中国言実出版社、2017年、367-368頁。

30 同注29、368頁。

31 「繁栄戯劇創作、為新時期的総任務服務 ── 本刊召開全国戯劇創作座談会」『人民戯劇』1978年第7期、22–23頁。

32 明康「戯曲、歌劇現代題材作品討論会、戯劇評論工作座談会在京挙行」『人民戯劇』1978年第11期、68頁。

33 賀竜「回憶紅二方面軍」『近代史研究』1981年第1期、23頁。

34 同注33、23-24頁。

35 同注33、27頁。

36 同注33、28頁。

37 中共中央党史研究室著、胡繩主編『中国共産党的七十年』中共党史出版社、1991年、117頁。

38 白樺は粛清事件について、「夏の間には攻撃の失敗から単純な防御へ転じ、軍隊は分割された。九月初め、最後の紅軍師団が西に撤退した。撤退中に、夏曦はまだいわゆる『改組派犯罪者』の処分をしていた。九月中旬、洪湖のすべてが敵の手に落ち、ラジオ局は失われ、中央との連絡は途絶えた。しかし、王明は、湘鄂西ソビエト区における粛清は『まだ組織的かつ大規模な取り締まりを開始していない』と絶えず叱責した。いわゆる『火線粛反』を実施し、保衛局は人を変え、独自の体制を作り、恣意的に人を逮捕した。多くの局級の幹部が誤って殺された。…（中略）…一九三三年初め、夏曦はまた、党団組織を解散し、いわゆる『新紅軍』を創設することを提案したが、指導部の承認を得られなかった。三月下旬に夏曦は党組織を解散し、軍の政治機関とソビエト政権を廃止することを厚かましくも決定した。彼

は、党と政権の十人のうち九人が『改組派』だと思っていた。…（中略）…その後、段徳昌同志をはじめ、紅軍で高い威信を集める指揮官などを殺害した。1934年までに、紅軍は3000人の兵士しか残っていなかった」と述べた。白樺「歴史的回顧与思考――創作『曙光』所想到的」『戯劇芸術』1978年第1期、30–31頁。

39　同注38、33頁。

40　白樺「文学在思想解放運動中的作用」『文芸理論研究』1980年第3期、27頁。

〔付記〕本稿は二〇二二年七月に開催された「慶應義塾中国文学会第七回大会」での口頭発表をもとに加筆修正したものである。大会の際には、諸先生方より貴重なご意見を賜った。ここに厚く御礼申し上げたい。